

第102回品質管理シンポジウム



# 感動と安心への 品質創造と品質保証

—ICTを活用した地球規模での感動・安心の創出—



経済産業省 製造産業局長

**糟谷 敏秀氏**

特別講演

「我が国製造業はどこに向かうのか？」

—「2016年版ものづくり白書」をふまえて—

電気通信大学 教授

※102 QCS 主担当組織委員

**鈴木 和幸氏**

基調講演

「感動と安心への品質創造と品質保証」

アレックス(株)

代表取締役社長兼CEO

**辻野 晃一郎氏**

講演1

「日本の復権に必要なこと」

トヨタ自動車(株) 専務役員

**伊勢 清貴氏**

講演2

「水素社会の実現に向けて」

—トヨタの環境技術戦略—

味の素(株) 常務執行役員

**加藤 敏久氏**

講演3

「味の素(株)の

安心・安全への品質創造」

(株)イーJイノベーションインスティテュート

取締役

**浅羽 登志也氏**

講演4

「インターネットの発展とIoT時代の品質管理のあり方」



開催期日：2016年6月2日(木)～4日(土)

会場：箱根ホテル小涌園

主催：一般財団法人 日本科学技術連盟

後援：一般社団法人 日本品質管理学会

## 趣旨



### 鈴木 和幸 氏

電気通信大学 教授

第102回品質管理シンポジウム  
主担当組織委員

昨年には、水野滋先生、朝香鐵一先生らとともに日本の品質管理（今日のTQM）の基盤を作られた石川馨先生の生誕100年を迎えました。先生は、デミング博士・ジュラン博士を通じてアメリカの品質管理を積極的に学び・導入し・推進するとともに、欧米流の専門家が行う品質管理を、現場第一線の人たちも含め、トップのリーダーシップのもとに皆で行う品質管理に発展されました。これにより1960年に出された貿易自由化計画大綱のもとでの「品質を基盤としたモノづくり立国」の基礎が作られ、60年代半ばに日本のTQM（当時はTQC）がほぼ確立しました。

その後、半世紀が経過し、今日、ますます厳しさを増すグローバル競争の中で生き残っていくためには、これまで長年にわたって培ってきた品質を原点とする経営にますます磨きをかけ、より特徴のある製品・サービスを生み出し、感動と安心をあたえるマネジメントの強化が必要となります。

これからの品質創造と品質保証におけるあらたな方向の一つは、ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）を積極的に活用することによって、全世界人口72億人全体を顧客とした、地球規模での感動と安心を与えるものづくりとサービスを提供することです。ICTの活

用により、国境や言語習慣に縛られることなく、顕在化および潜在化している顧客ニーズを探り、このニーズに応える「創造」によって顧客と社会に感動と満足を提供し続けなければなりません。一方、ICTを始めとする先進技術の日進月歩の進化は、社会構造やサービスの体系を複雑化・高度化させています。クラウドからOSへの接続による家電機器の再定義、ITデバイスの再定義、グローバルイゼーションの再定義などが生じつつあります。そのため、これらの信頼性・安全性の追求、即ち安心を担保することの重要性も必然的に高まります。この「感動と安心」を持続的に提供するためには、日本的品質管理TQMの役割と考え方が必須となります。

ここで留意すべきは、ICTを活用した品質管理を行うことが目的ではなく、品質管理の基本に立ったICTを活用して社会・顧客への感動と安心を与え続けることが目的です。ICTは道具・手段ですが、今後のモノづくりとサービスの提供はICT抜きには語ることができないものです。

以上の視点より、「感動と安心への品質創造と品質保証」なるテーマの下、顧客と社会に感動と安心を与える為の企画を検討しました。

## 本シンポジウムの の特長

- ① 今後の日本の品質管理の指針を示します。
- ② 質疑応答の時間を設け、日本を代表するゲストスピーカーから深掘した話を聞くことができます。
- ③ 「談話室」「グループ討論」「立食パーティー」など参加者が交流できる場を数多くご用意しています。

## プログラム

開催期日：2016年6月2日（木）～4日（土）

会場：箱根ホテル小涌園

月 日	時間	科目	講演者
6/2 (木)	19:30~20:40	<特別講演> 我が国製造業はどこに向かうのか？ －「2016年版ものづくり白書」をふまえて－	糟谷 敏秀 氏 経済産業省 製造産業局長
	20:40~21:00	質疑・応答	
	21:00~22:00	グループ討論メンバー自己紹介	
	22:00~23:00	談話室（参加自由）	
6/3 (金)	8:30~8:40	主催者挨拶	(一財)日本科学技術連盟 役員
	8:40~9:20	<基調講演> 感動と安心への品質創造と品質保証	鈴木 和幸 氏 電気通信大学 教授 ※102QCS主担当組織委員
	9:20~10:30	<講演1> 日本の復権に必要なこと	辻野 晃一郎 氏 アレックス(株) 代表取締役社長兼 CEO
	10:30~10:40	質疑・応答	
	10:40~11:00	休憩	
	11:00~12:10	<講演2> 水素社会の実現に向けて ートヨタの環境技術戦略ー	伊勢 清貴 氏 トヨタ自動車(株) 専務役員
	12:10~12:20	質疑・応答	
	12:20~13:10	昼食・休憩	
	13:10~14:20	<講演3> 味の素(株)の安心、安全への品質創造	加藤 敏久 氏 味の素(株) 常務執行役員
	14:20~14:30	質疑・応答	
	14:30~14:45	休憩	
	14:45~15:55	<講演4> インターネットの発展とIoT時代の品質管理のあり方	浅羽 登志也 氏 (株)IIJイノベーションインスティテュート 取締役
	15:55~16:05	質疑・応答	
	16:05~16:15	グループ討論の主旨説明	
16:15~18:05	グループ討論（1）	鈴木 和幸 氏	
18:15~19:15	夕食（立食）		
19:25~21:15	グループ討論（2）		
21:15~23:00	談話室（参加自由）		
6/4 (土)	8:30~9:55	グループ討論報告（10分×7班※予備15分）	司会：鈴木 和幸 氏 報告：各班リーダー
	9:55~10:10	休憩	
	10:10~11:40	総合討論	
	11:40~11:50	第102回 品質管理シンポジウム まとめ	鈴木 和幸 氏
	11:50~12:00	次回（103回）品質管理シンポジウム案内	佐々木 眞一 氏 日科技連 理事長 トヨタ自動車(株) 相談役・技監 103QCS主担当組織委員
	12:00~	昼食・解散	

※テーマおよびプログラムは、変更になる場合があります。



## 第102回 品質管理シンポジウム 講演概要

### 6/2 (木) 特別講演

#### 我が国製造業はどこに向かうのか? -「2016年版ものづくり白書」をふまえて- 糟谷 敏秀氏 経済産業省 製造産業局長

まず、製造業の足下の状況認識として、マクロデータからみる製造業企業の業績等を概観した上で、輸出拠点としての日本の優位性分析や国内への投資事例をご紹介しつつ、国内立地環境の動向を確認します。さらに、我が国製造業は、単にモノを売ることから、サービスなどソリューションと一体となった付加価値の提供を行う発想に移って行く中で、顧客の潜在ニーズを意識したイノベーションの創出、イノベーションの創出を通じた「稼ぐ力」による一層の強化に加え、IoTを活用したさらなる生産性向上やビジネスモデルの変革が必要となってきます。このような観点に立ち、我が国製造業の今後の方向性について説明します。



### 6/3 (金) 基調講演

#### 感動と安心への品質創造と品質保証

鈴木 和幸氏 電気通信大学 教授 ※102QCS主担当組織委員

今日、ますます厳しさを増すグローバル競争の中で生き残っていくためには、長年にわたって培ってきた品質を原点とする経営にますます磨きをかけ、より特徴のある製品・サービスを生み出し、感動と安心をあたえるためのマネジメントを強化していく必要があります。そのための新たな方向性の一つは、ICT(情報通信技術)の積極的な活用です。ICTの効果的な活用により、これまで以上に顕在化および潜在化している顧客のニーズを探り、新製品を開発・設計し、そして、上市後の市場・現場での顧客ニーズへの合致、問題点を徹底的に収集し、これらを次期製品へつなげることにより、全世界72億人を顧客とした地球規模での感動と安心を与える製品とサービスを提供することが可能となります。ただし、ICTを活用した品質管理を行うことが目的ではなく、ICTを活用して社会・顧客へ感動と安心を与え続けることが目的であり、その持続的成長のためには、TQMの役割と考え方が必須となります。本基調講演では、今回のシンポジウムの根幹を成す「感動と安心への品質創造と品質保証」について、前述の視点でその考え方を紹介します。



### 6/3 (金) 講演 1

#### 日本の復権に必要なこと

辻野 晃一郎氏 アレックス(株) 代表取締役社長兼CEO

インターネットやクラウドコンピューティングの発達で、地球規模ですべてのことが様変わりしました。加えて今後は、IoTや人工知能の発展によって世の中はさらに大きく変わることが予想されます。そんな中、東芝やシャープの事例を挙げるまでもなく、20世紀後半にメイド・イン・ジャパンのブランドを築き上げた日本の産業競争力に大きな陰りが見えています。少子高齢化も進み、成熟国家といわれるようになってきた日本が再び活力を取り戻し、世界に貢献していくためにはどうしたらいいのでしょうか。ソニー、グーグル、独立起業という道を歩んできた経験をもとに、これからの日本や世界について展望すると共に、チャレンジの大切さやリーダーの育成について、さまざまな実例を盛り込んだお話を予定しています。



### 6/3 (金) 講演 2

#### 水素社会の実現に向けて -トヨタの環境技術戦略-

伊勢 清貴氏 トヨタ自動車(株) 専務役員

モビリティが馬車から自動車へ進化したことにより、人類は便利で経済的な移動手段を手に入れた。一方で自動車の普及は化石燃料の大量消費をもたらし、自然環境の悪化やエネルギー不足の一因となった。トヨタはこれらの課題克服に向け、「省エネルギー」と「燃料多様化への対応」を最重要課題ととらえ、1997年に世界初の量産ハイブリッド車「プリウス」を発売。そして2014年にはプリウスで培ったハイブリッド技術を応用し、燃料電池自動車「MIRAI」の発売を開始。講演では自動車の歴史を紐解きながら、MIRAI発売にいたった背景や水素社会実現に向けたトヨタの様々な取り組みを説明すると共に、環境技術全般の取り組みや2050年に向けた長期ビジョンについても紹介する。



### 6/3 (金) 講演 3

#### 味の素(株)の安心、安全への品質創造

加藤 敏久氏 味の素(株) 常務執行役員

味の素グループでは、品質理念、品質方針に基づき、すべての商品・サービスを対象として、独自の品質保証システム「ASQUA※(アスカ)」を適用し、原料調達から販売までの厳しい品質保証を行っています。講演ではこの実施体制、取り組みを説明します。また取り組み具体例としてグルタミン酸ナトリウム、アスパルテームの安全性評価に加え近年承認された独自素材の安全性評価と許認可についても説明します。また2013年12月に国内他社で発生した冷凍食品への農薬混入事件をうけ食の安全体制強化への取り組み、さらに近年重要になってきている宗教対応や「アミノインデックスガンスクリーニング」のような新しいサービスの品質管理・保証についても報告します。※「ASQUA」とは1997年に制定した味の素グループ独自の品質保証システムで「Ajinomoto System of Quality Assurance」の略称です。



### 6/3 (金) 講演 4

#### インターネットの発展とIoT時代の品質管理のあり方

浅羽 登志也氏 (株)IIJイノベーションインスティテュート 取締役

過去20年余りのインターネットの発展は、それ以前の通信サービスのあり方をがらりと変えてしまいました。本講演ではまずその変革がどのような形で進み、結果として通信サービスやその品質の考え方をどのように変化させたのかを振り返ります。さらに、ここ数年の動きであるIoT(The Internet of Things)の基本的な考え方について説明し、現時点での方向性についてまとめます。最後に、今後IoTが産業界全体にどのようなインパクトを与える可能性があるのかを議論します。



# グループ討論

# テーマ・趣旨・論点

<p>第1班</p>	<p><b>「グローバル化時代におけるICT活用による感動と安心の創出へのトップの役割」</b>                  ■リーダー：久保田 洋志（広島工業大学 名誉教授）・井手 信（㈱キャタラー 執行役員 品質保証本部 本部長）</p> <p>趣旨                  グローバル化時代において、品質立国を標榜し、顧客指向で人財育成・能力活用を基本とする日本企業における感動と安心の創出に対するニーズは強くなっている。一方、革新的展開のICTは、ニーズを実現する有効な手段であるとともにニーズを高度化させている。この課題に対するトップのリーダーシップとコミットメントのあるべき姿について議論したい。</p>	<p>経営トップ対象</p> <p>論点                  次の論点に対するトップの役割について自由討論をする。                  ①グローバル化時代における感動と安心の創出のビジョンと戦略をどのように設定すべきか。                  ②ICT活用による感動と安心の創出のために、基本計画の策定と環境整備をどのように行うべきか。                  ③感動と安心の創出のためのICT活用の活動プロセスと手段について、指導と診断をどのように実施すべきか。</p>
<p>第2班</p>	<p><b>「ICT活用による地球規模の情報収集・分析」</b>                  ■リーダー：猪原 正守（大阪電気通信大学 情報通信工学部 情報工学科 教授）・佐藤 真人（㈱小松製作所 コマツウェイ総合研修センタ 所長）</p> <p>趣旨                  製品・サービスの提供を通じた品質保証を確実にするためには、市場や顧客の潜在しているニーズのみでなく潜在しているニーズから仮説を生成（Guess）、それを経済性や環境性などを考慮しつつ実現（Try）した後、市場または顧客ニーズとの差異（Error）を把握して学習（Study）し、成果物を市場または顧客に再提供することで、仮説の再生成を行うGTESのサイクル（PDCAのサイクルともいえる）を迅速にまわすことが大切である。従来は、ICT（情報通信技術）の制約から、限られた情報の収集対象に対する限られたデータ量を用いて、このGTESのサイクルを実施しなければならなかった。しかし、今日のICTの発達はGTESに対する制約を取り払いつつあり、「ことづくり」や「ものづくり」におけるビッグデータ解析を含むICT活用が企業の市場競争力を支配しつつある。このような主旨から、第2班では、次の点を中心として討論を行いたいと考えている。</p>	<p>論点                  ①「ことづくり」や「ものづくり」における市場や顧客のニーズを的確かつ迅速に収集し、解析するためのICT活用のあるべき姿とは何か。                  ②そのあるべき姿を実現するうえで、克服しなければならない「組織づくり」、「人づくり」、「技術づくり」、「しくみづくり」における問題は何か。                  ③その問題を解決する方策は何か。</p>
<p>第3班</p>	<p><b>「ICT活用を踏まえた感動創出へのモノ・コトづくり」</b>                  ■リーダー：梅室 博行（東京工業大学 工学部 経営システム工学科 教授）・向井 正人（本田技研工業㈱ 二輪事業本部 品質保証部 部長）</p> <p>趣旨                  企業がモノ・コトづくりの企画を行う際、最も重要なことは、顧客への感動の提供である。本グループではあえて具体的な技術やサービスから一回離れて「人間が感動すること」との本質を見つめ直し、企業がそのような深い感動の経験を提供できる機会を模索し、そしてその実現のためにICTによって何が出来るかのアイデアを参加者全員で考えていきたい。各社の実施例や構想を許される範囲で共有することももちろん、このグループの参加者全員で考えた感動の要因、感動を与える機会、そして実現のアイデアを参加者全員に持ち帰って頂きたい。そのために、感動経験を与えるモノとそれを使用する経験のデザイン、あるいは感動を与えるサービス体験とそこに必要とされるモノ、といったモノ・コトづくりの提案を目指し、ワークショップ形式も交えながら議論する。</p>	<p>論点                  ①人間が感動するとは何か。感動するための要因にはどのようなものがあるか。参加者全員の実体験を下敷きに議論する。                  ②人に感動を与えるためには何をしたらよいのか。どのようなことをしたら人は感動するのか。感動経験を与える機会を探る。                  ③企業が顧客に提供する製品・サービスのコンテキストで、②のようなチャンスを実現するとしたらどのようなものか。ICTを利用したモノ・コトづくりのアイデアや方向性の提案を目指す。</p>
<p>第4班</p>	<p><b>「グローバル化における安心・安全、そして感動のつくり込み」</b>                  ■リーダー：横川 慎二（電気通信大学 准教授）・藤井 暢純（サンデンホールディングス㈱ 品質担当 執行役員）</p> <p>趣旨                  グローバル化を背景として、製品・システムの「使用・環境条件・保全サービス等」には千差万別の差異が生じている。そのため、昨今「設計・開発プロセス」における情報活用範囲が急速に拡大している。本日はICTからの情報に加えて、ビッグデータ等の活用により上記の差異をいかに設計に生かせるかについて、「安全をつくり込み、全世界の顧客へ安心・感動を与えるための『プロセスの構築』と『そのプロセスの実践』、それらを『どのように評価するか』について」検討する。同時にそれぞれのプロセスにおける企業と大学などの「産学官の共同研究の可能性」を探る。</p>	<p>論点                  全世界の顧客へ安心・感動を与えるための設計・開発における「優れたプロセスとは何か」について検討する。                  ①最新のICT等を活用した設計・開発における「プロセス」について、いかに構築したか、または構築すべきか。                  ②次に①で構築された「プロセス」をどのように実践したか、またはすべきか。                  ③更に②で実践した成果をどのように評価したか、またはすべきか。                  ④上記①②③の全フェイズにおいて、共に「産学官の共同研究」に関する可能性、実施例等について検討する。</p>
<p>第5班</p>	<p><b>「グローバル化時代における安全な現場の基本」</b>                  ■リーダー：荒木 孝治（関西大学 商学部 教授）・鈴木 直人（日野自動車㈱ TQM推進室 室長）</p> <p>趣旨                  海外工場における労働災害の発生件数は国内と比べると多い。国内外を問わず工場・作業現場での労働災害の防止にはシステムティックに取り組むことが必要である。しかし、社会制度や文化、宗教等の相違から、真の現地化は難しいのが現状である。第5班では、こうした制約のもとで、教育、訓練、エラープルーフ、フェイルセーフ、リスクアセスメントなどを含めた安全なプロセスの構築について、安全のマネジメントとハードウェアの工夫という両面から検討する。安全な現場づくりにおけるICTの活用のあり方についても検討したい。</p>	<p>論点                  ①安心を創出する人材育成への現状とあるべき姿                  ②感動を創出する人材育成への現状とあるべき姿                  ③感動と安心創出へ向けて、上記のギャップの原因とその対策を自主性も含めて検討したい。</p>
<p>第6班</p>	<p><b>「ビッグデータの活用のしくみとデータサイエンティストの育成」</b>                  ■リーダー：須江 雅彦（総務省 統計情報戦略推進官 データサイエンス教育研究推進官）・山田 秀（筑波大学 ビジネスサイエンス系 教授）</p> <p>趣旨                  ICTの発達により、顧客の使用状況や使用環境などのデータが大量に入手できるようになっている。これらのデータは様々な用途で活用される中、第6班では、現在提供している製品、サービスが顧客の要求を満たしているかという妥当性確認（validation）について焦点を当てる。市場、現場での使用から得られるビッグデータの活用について、分野に固有な技術的な課題そのものよりも、技術的課題を促進、管理するための分野横断的なしくみ、人材の育成などについて議論する。</p>	<p>論点                  ①顧客の使用状況などのビッグデータの妥当性確認（validation）などへの効果的な活用について、促進、管理するために直面している課題は何か。                  ②①の活用を積極的に進めることができる人材像を明確化するにはどうするか。                  ③②の人材育成のために、社内での取り組むべきこと、社会、大学で取り組むべきことは何か。</p>
<p>第7班</p>	<p><b>「感動と安心創出への人材育成」</b>                  ■リーダー：石津 昌平（青山学院大学 理工学部 経営システム工学科 教授）・齊藤 忠（岡谷電機産業㈱ 経営企画部 部長）</p> <p>趣旨                  感動と安心創出への人材育成において、専門技術の教育やICT教育だけでなく、TQMで育まれてきた自主性の発揮や全員参加の観点から人材育成のあり方を議論したい。特に、近年事故や不祥事が多発している中、安心・安全に向けた人材の育成が喫緊の課題だと考えられる。また、顧客や社会に感動を与えるような創造性を育む人材の発掘や育成が期待されている。感動と安心創出に向けた人材育成について現状の対策と課題について議論し、目指すべき人材育成のあり方を探りたい。</p>	<p>論点                  ①安心を創出する人材を育成するために、現状ではどのような対策が行われているか。そこでの課題は何か。                  ②感動を創出する人材を育成するために、現状ではどのような対策が採られているか。そこでの課題は何か。                  ③感動と安心創出への人材育成に必要な事項、あり方とは、どうあるべきか。</p>



## 参加要領

開催日時 **2016年6月2日(木) 19:30 ~ 6月4日(土) 12:00**  
(6月2日受付開始17:00~, 夕食18:00~)

会場 **箱根ホテル小涌園**  
〒250-0407 神奈川県足柄下郡箱根町二ノ平  
TEL. 0460-82-4111 FAX. 0460-82-4137



参加対象 企業の役員, 上級管理職の方々

参加費 ○一般  
129,600円/1名(消費税込み)

○本シンポジウム賛助会員会社

**トップ枠(会長・社長), 通常枠 各1名無料** 3人目から43,200円/1名(消費税込み)

※**トップ(会長・社長)が参加されない場合は, 無料参加枠は通常枠1名のみとなります。**

※食事代(6月2日夕, 6月3日3食, 6月4日朝・昼)は日科技連が負担いたします。尚, 宿泊費, 交通費はご負担ください。

バス送迎サービス JR小田原駅をご利用頂く賛助会員の方は開催地までのバス送迎サービス(時間帯限定)をいたします。詳細は, 開催要領にてご案内いたします。

申込期日 第1次締め切を4月18日(月)とさせていただきます。

## シンポジウム申込方法

QCS専用Webサイトからお申し込みください。

<http://www.juse.or.jp/qcs/>

### 申込フロー

QCSホームページへ  
アクセス

上段のメニューから,  
「参加要領・申込み」

ページ内下段  
「お申込み」  
ボタンをクリック

連絡担当者入力  
参加者入力

確認画面

登録完了

## 最近の主な講演者

(組織名・役職は講演当時の表記になっております)



第101回  
TOTO(株)  
代表取締役副社長執行役員  
猿渡 辰彦氏



第101回  
エリーパワー(株)  
代表取締役社長  
吉田 博一氏



第100回  
トヨタ自動車(株)  
名誉会長  
豊田 章一郎氏



第99回  
マツダ(株)  
代表取締役 会長  
金井 誠太氏



第97回  
(株)ブリヂストン  
相談役  
荒川 昭四氏



第96回  
(株)ローランド・ベルガー  
日本法人会長  
遠藤 功氏

## 品質管理シンポジウム組織委員

(五十音順, 敬称略) ※◎は第102回品質管理シンポジウム主担当組織委員



圓川 隆夫  
東京工業大学名誉教授



大橋 徹二  
(株)小松製作所  
代表取締役社長(兼)CEO



佐々木 真一  
日科技連 理事長  
トヨタ自動車(株) 相談役・技監



佐藤 和弘  
トヨタ自動車(株) 常務役員



◎鈴木 和幸  
電気通信大学 教授



田中 千秋  
東レ(株) 顧問



中條 武志  
中央大学 教授

# 品質管理シンポジウム賛助会員にご入会ください!

## 品質管理シンポジウム (QCS) とは

- 品質経営を進めるうえで、経営陣には是非とも参画していただきたいシンポジウムです。
- 1965年の創設以来、**年2回(6月, 12月)開催**しています。
- QCS独自の「**賛助会員制度**」により、趣旨にご賛同いただいている企業様から資金的なご協力のもと組織的、計画的な運用を行っています。
- 組織委員制度**(回ごとに主担当をおく)により、企画立案を行っています。
- 各回でテーマを決め、テーマにちなんだ**講演・グループ討論・総合討論**を実施しています。

### 品質管理シンポジウム、賛助会員入会のメリット・費用

- メリット 1** >>> 講演(トップランナー企業)から、TQMの推進・動機づけに役立つ情報が得られます。
- メリット 2** >>> グループ討論等で、他社の考え、推進事例等を議論し、課題解決への糸口を見つけられます。
- メリット 3** >>> 参加者同士のコミュニケーションを深める場を多く設定しており、品質経営推進企業幹部との人脈が形成されます。

入会費用▶1口につき年額**187,920円**(消費税含む)

入会いただきますと

●**無料参加枠2名(トップ枠・通常枠)を確保できます。**

- 無料参加枠以外の方は特別価格(43,200円)でご参加いただけます。
- 本シンポジウムの発表報文集・実施報告が無料で入手できます。

※日科技連賛助会員とは異なります。QCS独自の賛助会員制度です。  
※ご入会は、随時受付けております。

### 品質管理シンポジウム 賛助会員会社

※2016年3月1日現在、50音順 93社

1 (株)アーレスティ	20 (株)小松製作所	39 (株)テクノプロ テクノプロ・R&D社	56 日華化学(株)	75 べんてる(株)
2 アイシン・エイ・ダブリュ(株)	21 澤藤電機(株)	40 テックスエンジンリサーチョンス(株)	57 (株)日科技連出版社	76 (株)保志
3 アイシン精機(株)	22 サンデンシステムエンジニアリング(株)	41 (株)デンソー	58 日産自動車(株)	77 本田技研工業(株)
4 愛知製鋼(株)	23 サンデン物流(株)	42 東芝機械(株)	59 日産車体(株)	78 前田建設工業(株)
5 アイホン(株)	24 サンデンホールディングス(株)	43 東レ(株)	60 日本電気(株)	79 (株)前田製作所
6 (株)アドヴィックス	25 サンワテック(株)	44 TOTO(株)	61 (株)日本科学技術研修所	80 マツダ(株)
7 (株)インターワークス	26 (株)GSユアサ	45 トクラス(株)	62 日本特殊陶業(株)	81 (株)マルヤスエンジニアリング
8 NECフィールディング(株)	27 (株)ジーシー	46 豊田合成(株)	63 パナソニック(株)	82 丸和電子化学(株)
9 (株)MCシステムズ	28 (株)ジーシーデンタルプロダクツ	47 トヨタ自動車(株)	64 パナソニック ヘルスケア(株)	83 三島食品(株)
10 エリーパワー(株)	29 (株)ジェイテクト	48 トヨタ自動車九州(株)	65 パナック(株)	84 (株)村田製作所
11 オージー技研(株)	30 清水建設(株)	49 トヨタ自動車東日本(株)	66 (株)羽生田製作所	85 (株)メイドー
12 大塚化学(株)	31 JUKI(株)	50 (株)豊田自動織機	67 パラマウントベッド(株)	86 名北工業(株)
13 オムロン(株)	32 住友理工(株)	51 トヨタ車体(株)	68 ピアメカニクス(株)	87 (株)安川電機
14 鹿島建設(株)	33 積水化学工業(株)	52 トヨタ紡織(株)	69 日野自動車(株)	88 (株)ユニバンス
15 関西電力(株)	34 (株)セキソー	53 トヨタホーム(株)	70 ファーウェイ・ジャパン(株)	89 (株)リコー
16 (株)キャタラー	35 ダイキン工業(株)	54 長津工業(株)	71 富士ゼロックス(株)	90 リコーエレメックス(株)
17 コーセル(株)	36 ダイヤモンド電機(株)	55 新潟ダイヤモンド電子(株)	72 富士電機(株)	91 リコーテクノロジーズ(株)
18 小島プレス工業(株)	37 (株)竹中工務店		73 フジミ工研(株)	92 (株)良品計画
19 コニカミノルタ(株)	38 (株)千代田グラビヤ		74 (株)ブリヂストン	93 ローム(株)

### 問い合わせ

一般財団法人日本科学技術連盟 品質管理シンポジウム担当(安随/池田)

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南1-2-1

TEL: 03-5378-1213

FAX: 03-5378-9842

E-mail: tqmsemi@juse.or.jp